

12回 リスク社会論／リスク社会論について学ぶ。

リスク社会論とは

コトバンク参照

現代社会の特質を環境破壊、原発事故、戦争、テロリズムといった危険、不確実性という側面に焦点を当てて説明する社会学理論。

リスク社会論の展開

1986年4月のチェルノブイリ原子力発電所事故後、ドイツの社会学者ウルリッヒ・ベック（1944—2015）によって本格的に展開された。彼は、学術的な本としては珍しくベストセラーとなった著作『危険社会』（1986）において、リスク社会論を以下のように定式化した。

※ リスク社会とは、産業社会が環境問題、原発事故、遺伝子工学等にみられるように新たな時代、別の段階に入り、それまでとは質的に全く異なったりリスクをもつようになった社会のことである。

異なった性格とは、「困窮は階級的であるが、スモッグは民主的である」という言葉に象徴されるように、環境汚染や原発事故といったリスクが階級とは無関係に人々にふりかかり、ある種の平等性、普遍性をもっていること、そしてチェルノブイリ原発事故に端的に示されているように、リスクのもつ普遍性が、国境を越え、世界的規模での共同性、いわゆる世界社会を生み出していることが挙げられる。

その意味で、今までの一国社会、国民国家、また国内での階級的不平等を主要な特徴としていた産業社会から決別し、新たな段階としてリスク社会に入ったというわけである。ただし、だからといってリスクが階級と無関係に存在するとベックは主張しているわけではない。貧困が条件の環境破壊と産業技術上の危険が存在することも認識しながら、彼は上述の議論を展開している。

彼は「リスク」という概念と、「危険」という概念を峻別する。

危険とは、例えば天災のように人間の営み、自己の責任とは無関係に外からやってくるもの、外から襲うものである。それに対してリスクとは、例えば事故のように、人間自身の営みがつくり出したものであり、自らの責任に帰するものである。

リスクとは、自由の裏返しであり、人間の自由な意思決定や選択、予見、可能性、制御可能性に重きをおく近代社会の成立によってはじめて成立した概念である。リスク社会の本質は、本来予見・制御可能であったはずのリスクが社会の変質に伴い、世界的規模で広がり收拾がつかなくなり、グローバルな危険になってしまう。

危険の次元は、環境破壊、金融危機、テロのネットワークの三つに区分される。しかし、危険のグローバル性は、内政と外交との区分を流動化し、テロに対する戦いのように逆にグローバルな同盟を生み出す。彼によれば、リスク社会の自己再帰性である。彼のリスク社会論には、ニクラス・ルーマンによ

るシステム理論の立場からの批判的検討がある。またリスク社会論は、同時代のイギリスの社会学者アンソニー・ギデンズの現代社会論にも大きな影響を与えている。 [島村賢一]

ドイツのリスク分類

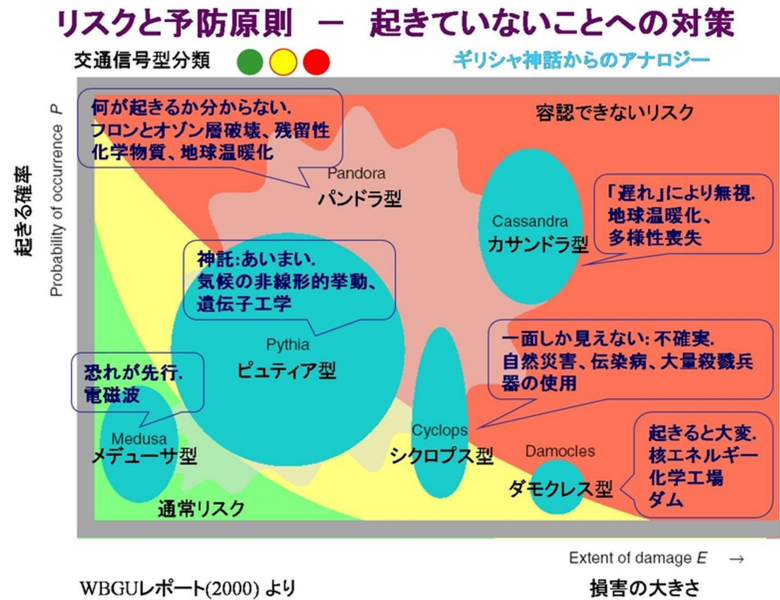
伊藤公紀ブログ引用

ドイツの研究機関 WBGU のリスク分類図は事象の頻度と災害の程度によって、ギリシャ神話にちなんだ名前が付いている。原発は「ダモクレス型」、つまり「頻度は少ないが、起きた時の災害は大きい」とされている。

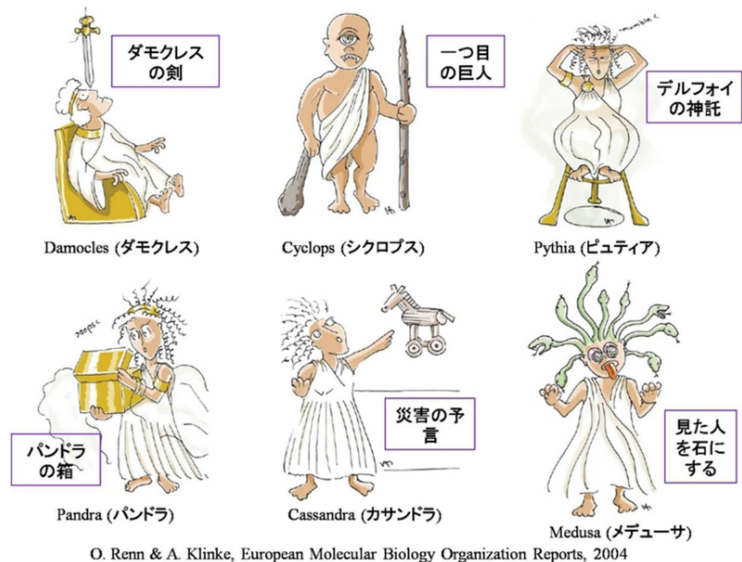
これはドイツで作られたものでドイツの事情を反映している。どこにでも当てはまると考えてはいけないだろう。まず、参考としてそれぞれのリスク型について、ギリシャ神話のどんな逸話に対応するかというイラストがあるので、紹介しておく。古代ギリシャの社会が、現代社会と類似のリスクに接していたからということらしい。

ところで、ドイツでの原発は「ダモクレス型」で良いとして、日本の原発は「カサンドラ型」ではないかと思う。カサンドラ型は、起きる確率はダモクレス型よりも大きいが、「遅れにより無視される」というように性格付されている。カサンドラは、トロイ戦争の時に侵略を予言したが、無視されることを運命づけられた、悲劇の予知能力を持つ女性。このエピソードは、福島第一原発の事故を彷彿とさせる。科学的な予想で地震と津波の危険性を指摘され、事故が起きる確率はドイツなどよりもずっと大きかった。実際、1000年に一度とは言っても、原発の寿命が40年や50年なら、その寿命のうちに貞観地震・津波クラスに出会う確率は1/20~1/25と決して無視はできない。

実弾が20回に1回出るようなロシアンルーレットをやるということだ。しかも、最近の地震学によれば地震の確率は大きく変化する。ここ数十年は地震活動が不活発だった。ということは、不活発な時期



WBGUレポート(2000)より



O. Renn & A. Klinke, European Molecular Biology Organization Reports, 2004

に 1000 年に 1 度の確率だと、活発な時期には 100 年に 1 度に確率が上がっても不思議はない。もしそうなら、**確率は 1/2 ~ 1/4 になってしまう**。これは起きて当然ということだ。つまり、残念ながら日本の原発のリスクは、「確率は大きく、災害も大きい、いつ来るか分からないので無視される」カサンドラ型と考えるべきだ。この型のリスクは、『容認できないリスク』である。**予防原則に従うなら、安全性の確保できていない原発を止めるのが最善だ**。なお、図では地球温暖化はカサンドラ型になっているが、最近の研究成果を参考にするとメデューサ型に近付いているように思われる。

環境リスク論について

広島大学 地球資源論研究室 HP ほか参照

リスクとは、何らかの被害を受ける危険性のことであるが、**環境リスクとは環境問題から受けるリスク**であり、その評価法等を学問的に研究する分野が**環境リスク論**である。

有害物質の場合、発癌性であるか否かなど、致死率の高い場合とそうでない場合とでは、閾値の有無も含めて取り扱いが異なる。定量的な評価基準を汎用的に策定することは難しいので、**金額や死亡率などの現実的な数値に換算する手法等が提案されている**（環境経済学的手法）。

被害を与える原因物質が閾値を持つか否かはリスク評価に大きな影響を与えるが、人体実験を行えないため、評価の指針作成も簡単ではない。有害物質であれば、医薬品と同様の問題があり、動物実験や人身事故（被害）などのデータなどから人体に対する影響を設定している。

たとえば、環境ホルモンの問題について述べると、環境ホルモンは俗称であり、正式には**内分泌攪乱物質**と呼ばれる。生体内のホルモンと似た性質を持ち、その機能を妨害することで、様々な支障を引き起こすと言われている。環境へ放出された化学物質の一部がそのような働きを行う。

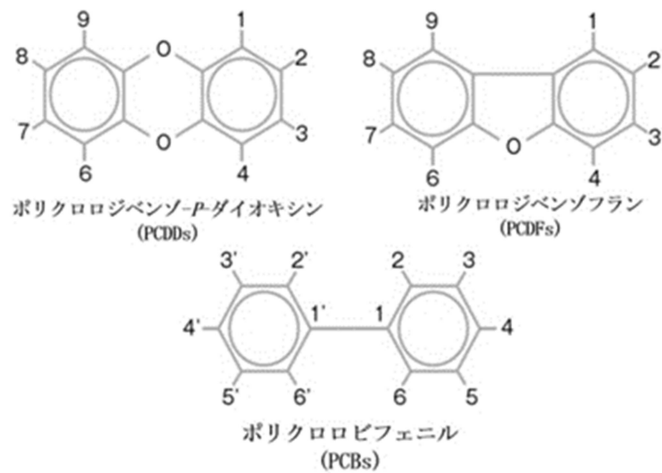
レイチェル・カーソンによる『沈黙の春』やシーア・コルボーンらによる『奪われし未来』などにより、特に農業に由来する化学物質の脅威が注目されて使われるようになった。環境中に非常に少量が存在するだけで、生物に対して影響を与えるということで注目されたが、近年は他の問題の陰に隠れてしまっている印象が強い。これは、人に対する大きな被害がまだ発生していないためであると思われる。

環境ホルモンの代表的な物質として、**ダイオキシン、PCB（ポリ塩化ビフェニール）、DDT**などがある。環境ホルモンは化学物質である。化学物質を大量に摂取しているとは誰もが思わないが、日々の生活の中で環境ホルモンは身体の中に取り込まれる。**殺菌剤・防腐剤・殺虫剤・農薬・食品添加物など、約 70 種もの化学物質**があげられる。さらに、環境汚染された状態の川や海などからも有害物質が検出されている。**産廃処分場の浸出水から、30 種以上の環境ホルモンが検出された**という例もある。

環境ホルモンの問題は、1980 年頃に世界各地で生態系異常が発見されることで研究されるようになった。環境ホルモンは、あるひとつの物質の名前ではなく、生物のホルモンの働きを狂わせてしまう物質の総称で、体内のホルモンの働きを壊す。代表的な症状は、生殖器の異常・精子の減少・生殖器のがん・性行動の異常など。

ダイオキシン

焼却場から出される煙や灰の問題から、ずいぶん騒がれるようになった「ダイオキシン」は、「環境ホルモン」の一種。合成洗剤、殺虫剤、農薬、プラスチック製品の中途半端な焼却灰に発生する。



ダイオキシン汚染の影響

- ・フロリダのワニやカモメの生殖障害による減少、イルカやアザラシの大量死。
- ・巻き貝メスのオス化、貝類から哺乳類まで多種生物に影響 → 絶滅の危機。
- ・人間への影響 → 胎児の奇形、死産、生殖機能の低下・異常、性行動の異常（ゲイ化、レズ化）
精神不安定（凶暴化、キレル、ムカつく）、発ガン性（精巣癌、乳癌、子宮癌）
子宮内膜症、アトピー、アレルギーなど。
- ・生物濃縮により食物連鎖の上位の生物ほど影響が大きい
(プランクトン：500倍 → エビ：4万倍 → 小魚：80万倍 → 大型魚：280万倍
→ カモメ：2500万倍 → 北極熊：1億倍)

環境ホルモンは、人類存続の危機を招いていると言われている。もちろん、人類だけではなくすべての動物の絶滅の危機になっている。もうすでに小さな貝から北極クマまで、雌雄同体の生き物たちが多数みつまっている。